

**WS1-4 PET-CTを用いた臨床病期Ia期非小細胞肺癌の縮小手術適応決定の試み(ワークショップ FDG-PETの意義と応用1, 第48回日本肺癌学会総会号)**

著者	佐藤 幸夫, 金井 義彦, 大谷 真一, 山本 真一, 長谷川 剛, 遠藤 俊輔, 塚田 博, 蘇原 泰則
雑誌名	肺癌
巻	47
号	5
ページ	452
発行年	2007-10-10
権利	日本肺癌学会
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00134105">http://hdl.handle.net/2241/00134105</a>

#### WSI-4 PET-CTを用いた臨床病期Ia期非小細胞肺癌の縮小手術適応決定の試み

佐藤 幸夫<sup>1</sup>・金井 義彦<sup>2</sup>・大谷 真一<sup>2</sup>・山本 真一<sup>2</sup>

長谷川 剛<sup>2</sup>・遠藤 俊輔<sup>2</sup>・塚田 博<sup>2</sup>・蘇原 泰則<sup>2</sup>

宇都宮社会保険病院 呼吸器外科<sup>1</sup>；自治医科大学 呼吸器外科<sup>2</sup>

背景：近年、CT検査の普及と共に、野口のA/Bのような浸潤性のない、積極的縮小手術の適応と考えられる小型腺癌の頻度が増加している。しかし、術前CT及び術中迅速病理診断のみでは浸潤性の有無の判断は完全でない。我々はPET-CTを組み合わせ浸潤性のない小型肺癌の選択を試みた。方法：術前PETを施行した臨床病期Ia期非小細胞肺癌100例(109病変)を対象とした。FDG投与60分後に早期像、120分後に後期像を撮影し、各々腫瘍部SUVの最大値を測定した。結果：AAH、野口A/B(n=18)：3例を除きSUVは後期で低下し、後期最大値は2例を除き1以下であった。0.77±0.34(0.24~2.15)最大径2cm以下の症例では1例を除きSUVは後期で低下し、後期最大値は全て1以下であった。0.57±0.19(0.24~0.81)。野口C(n=38)ではSUVは後期で22例で上昇、16例で低下した。後期最大値は1.83±1.05(0.46~4.33)であった。線維化巣の5mm以下の例(n=17)で低い傾向があった<5mm；1.23±0.90(0.46~3.31)、>5mm(n=21)：2.30±0.93(1.07~4.33)。野口D/E/F(n=40)では5例を除きSUVが後期で上昇し、後期最大値はすべて2.0以上であった5.61±2.78(2.00~14.73)。扁平上皮癌では(n=13)、1例を除きSUVが後期で上昇し、後期最大値はすべて2.2以上であった8.82±5.38(2.21~22.12)。結論：野口A/Bは後期でSUVが低下し、C以上及び扁平上皮癌では上昇することが多く、後期値が良い判別の指標になると考える。PETはCTにてBACが疑われる際に、浸潤の有無の判断に有用な情報を与え、最大径が2cm以下で後期最大値が1以下の症例ではCT所見及び術中迅速病理診断と組み合わせ、積極的縮小手術を選択することが可能と考えられる。